難攻不落？

紫苑　鎌鼬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
難攻不落？

【Ｎコード】
Ｎ２５６６ＢＡ

【作者名】
紫苑　鎌鼬

【あらすじ】
魔の力、魔力を宿す存在が住むといわれる魔界、
弱肉強食世界に王に君臨する最強のライアスは、
魔の者が非力でひ弱だと軽蔑し謳う人間を妃にすると宣言した。
魔の者たちの反発を食らうが、最強である王は意見を覆すはずもなく、
そして一人の少女を召喚する。その少女に王は一目で惚れてしまうが、その少女は、大きなトラウマを負った、孤独な少女だった。
王はその難攻不落少女をお・と・す・ことができるのか！？

１－１運命の召喚

ここは魔界。
その魔界の王に君臨する魔の存在ライレスは
王の次に強いとされ、地位の高い妃の座をめぐる魔物の争いにうんざりしていた。

そんな理由から、魔物たちが、非力かつひ弱な存在と謳うニンゲンをかの王は娶ると宣言し、下々の魔物たちはどよめいた。

それは召喚式とされ、
条件は、

その１　王に匹敵する魔の力を宿せる存在であること
その２　王の魂と共鳴しあう魂の持ち主であること
その３　人間界で死のふちに立ったものであること

である。

「王、今からでもおそくありません、撤回してくださいっ
ニンゲンから娶るのやめると！！」

王の側近ルートは今にも泣き出しそうだった。
お願いだからニンゲンの妃はやめてくれー！！と懇願の勢いであった。――が・・・。

「何を今更言っている。早く始めろ。俺は撤回など断じてしない。」

王、ライレスは召喚を行う（これから行わさせる）己の側近の方に

振り向く。
そして冷徹な声で先を促した。

ライレスとしては早く召喚を行い、
魔方陣から出現するであろう未来の妻を早く拝みたいのだから、
この台詞は当然の答えであろう。

「わかり・・ました。では、やります」

側近はすぐにあきらめ、了承し、魔方陣の端に両手を置き、魔力を込めた。

長い間側近は呪詛を呟き、魔力を込め続けた。

ーーフワァンッ

すると、陣の中央に白い光が出現した！
ふんわりしたやわらかそうな光から、一人の小柄な少女が現れ、その場でへたり込む。

「・・・！」

ライアスは心が少女に急速に惹かれていくのを体感した。
そして同時に目を見張った。

長い黒髪に黒い瞳、愛らしい顔立ち・・しかし、
服は所々破れ、
怯え恐怖の渦の真っ只中にいるとさえ感じさせる雰囲気が彼女にあった。

早く守ってやらねば、早く保護して安心させなければ！
そんな思いがライアスの中に渦巻き、その一身で彼女に近づいた。
「・・っ！？」
彼女は目を潤ませ、じりじりとそのままの姿勢で後退していく。
ばさっ
逃げ道をなくすように、包み、守るかのように己のマントを
ライアスはその少女にかけてやった。
「大丈夫だ、怖がらなくていい。
俺はライアスだ。お前の名は何だ？」
包むようにライアスは彼女の背中をマントごしに抱きしめ、
彼女に問う。
「・・っ、レイ・・、ラ・・」
彼女は恐怖し怯え、混乱しながらも、震えた声でそう答えた。
ライアスの魔力に、ニンゲンからしたら異なる容姿に圧倒している
のだろうか・・
少しでも抱きしめる腕の力を強くすれば壊れてしまうかのようなか
弱い声だ。
「レイラ・・。良い名だ。
とてもお前に似合っている・・。」

ライアスは、レイラ、という響きにうっとりした。
何回も口の中でその言葉を転がす。
なんて麗しい彼女にぴったりな名前だろう。
そんな思いでライアスの心はいっぱいだったが、

この陣の中央でそんなにゆっくりしてる暇はない。
それに彼女の身が危なかった。

ニンゲンは非力でひ弱で何の魔の力を持たぬ存在だ。
そのため、魔界の大気、そして魔の存在の魔力に当てられたりでもすれば
ニンゲンは蝕まれ命は消え去るだろう。

それほどにニンゲンにとっては
魔は、魔の存在は、毒に値するのだ。

だが、逆に、魔の者から言わせて見れば、
ニンゲンほど、魔に染まりやすい存在はほかにいない。

ニンゲンを魔に染めるには、魔界の者の血を与えればいい。
ニンゲンは、それを抵抗なく受け入れ自分の糧に出来る器と純粋さがある。

魔界の者の血を取り込み、魔へと生まれ変わるのだ。
魔界(ここ)で生きていくためにはそれしかない。

魔方陣の中にいるからまだ、彼女にとって無害だが
一歩生身で外をうろつけば、彼女の命は一瞬で消え去ってしまうだろうから。

「ー〜〜っっ・・・・・、」

彼女は名を褒められたせいなのか、戸惑い、そして落ち込みをみせる。

「レイラ、これを飲んでくれ」

「・・・？」

キュポンッ

らいアスは小瓶のふたをとり、彼女に渡そうと、近づける。

「俺の血だ。ニンゲンの生身でこの世界では生きていけない。頼む、飲んでくれ」

「血・・・っ！？」

彼女は目を大きく見開き、怯え、後ろに引き下がろうとする。

「頼む」

「・・・・っぃやっ、・・む、むり・・っ」

懇願しても彼女はいやだと恐怖を宿した瞳と表情で首を振る。

彼女に合わせていたらだめだ。ライアスはそう考えた。

「レイラ、すまない」

ライアスは己の血を口に含み、彼女にそのまま、口付けた。
彼女の後頭部と手を押さえ込み、唇と唇の隙間を詰めて深くしていく。

「んんぅっ！？」

彼女の口をこじ開け、己の血を流し込む。

「んっ、んんっ・・」

はじめは抵抗していたが、俺の力に負け、最後は血を飲み込んだ。

「んっ・・」

その動作を終え、唇を離すと、彼女に変化が訪れた。

「・・・・っ”」

彼女は一瞬、体をこわばらせた。
それと同時に、闇が彼女を包み込む。

「・・・」

周囲のものは息を潜めて事の成り行きを見つめる。

彼女からライアスに匹敵する魔の力を感じた。
それは彼女が魔に転生することを意味していたのだ。

闇は彼女の左胸へと最後に収まっていき、
そこには、ライアスの額に刻まれている闇の薔薇と同じ模様が刻まれていった。

それを確認すると同時に

ガクンッ

彼女の体が崩れ落ちた。

「・・・おいっ」

あわててライアスは彼女を支え、包み込むが

「・・・・・」

返答は　なかった。

気を失っているようだった。

「ルート、俺は、妃の世話をする。あとは任せた。」

ライアスはそう、側近に言い放ち、レイラを抱き上げて

早々に部屋に去っていったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2566ba/

難攻不落？

2012年1月6日16時52分発行